

文化高知 24

高知の印象

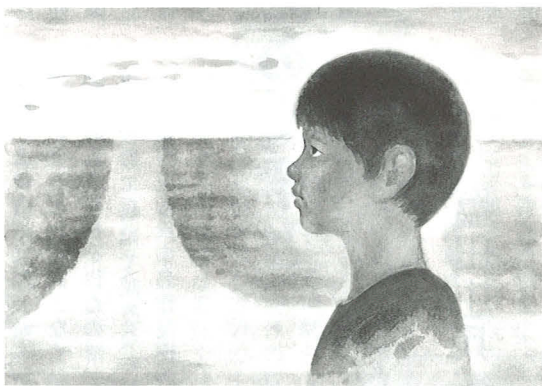
高知営林局への転勤の内示を受けたその瞬間、五年前に在住していた豪州の事を思い出した。何故だろうと後で考えてみると、東京からはるか海を隔てた地という点が共通しているが、更に、四国の形が豪州大陸のそれにやや似ていることに気が付いた。地理に興味のある方は世界地図を開いて眺めて見てほしい。

私の豪州生活は快適であったが、高知での生活もそれに近いものになるだろうと直感的に思った。

赴任の日、高知は雲一つなく晴れ上がり、爽やかな暑さであった。紺碧の空、海の青さ、山の緑、水清き川など豊富な自然に恵まれた南国の町、それが高知の第一印象であった。見るもの聞くもの、そして出会う人々も皆、私にとっては新鮮なものであった。あれから早くも三ヵ月になろうとしている。

仕事の性質上、各層の人々に会う機会が多いが、最初は取っ付きが悪い。しかし、気心が知れると、これほど明るくはつきりしていて、しかも人情味のある人々は他にはいない。優れた自

然とともに、この人々の気質が貴重な財産であると思う。この四月に開通した本四架橋の影響が高知にも徐々に現われてきており、これから国民休暇県



「少年」市川雅彦

構想の具現化が図られようとしている時、このような高知人の気質との触れ合いが、今後の高知の発展に大いに貢献するものと信じている。

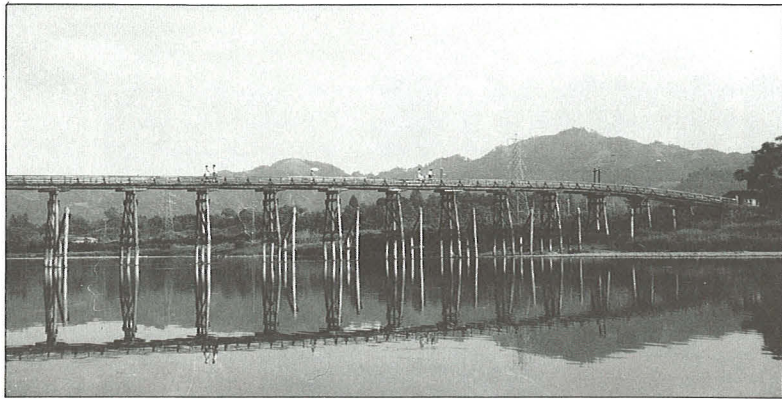
最近、「夕方文化」とか「夕方時代」

草野英治

とかいう言葉が口にされつつある。これは、これまでの生活が、仕事で緊張している昼と、家で昼の疲れを癒やす夜に分かれていたのに対し、これからは、その中間である夕方にスポットをあて、そこに文化を見い出そうということのようである。その典型が、各地で小劇場が建設されたり、演奏会に長蛇の列が続くといった具合である。高知は、職場と住居の時間差が非常に小さい所であり、この条件を生かした「夕方文化」の華が咲く都市となるのではないかと考えている。最も私にとっての「夕方文化」はカラオケ程度がオチであろうが……。

最後に一つ注文をしておきたい事がある。高知市は、文化都市にしては下水道の普及率が二十二・三パーセントと極めて低い。私の家の近くの川は、どうかすると悪臭を放つ。生活排水が垂れ流しなのである。一日も早く下水道が整備され、より快適な文化生活が楽しめる高知市になることを期待している。

(高知営林局局长)



第四回 高知の映像コンテスト 講評

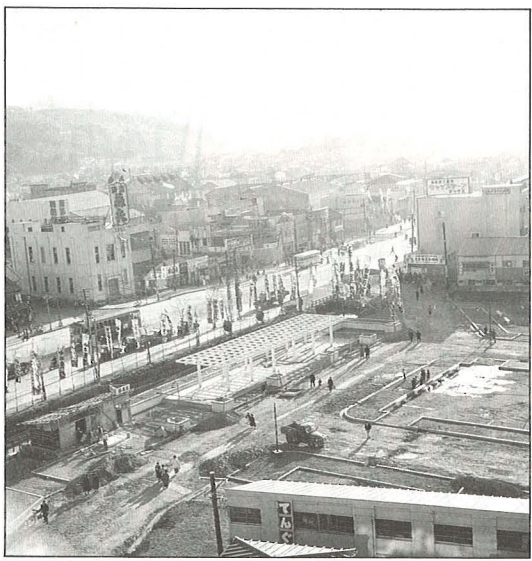
第四回高知の映像コンテストの結果について、審査委員の貴重な講評が行われた。もう一度それを確認することによって、次回に向けての方向性を探ってみよう。

まず写真の部では前回の約三倍・百五十九点の応募があり、遠くは宿毛・室戸からも作品が寄せられた。その内容も、古い時代を記録したもののからごく最近のものまであり、質・量ともに充実したコンテストとなった。

ただ、古く記録性の高い作品と思われるものが、撮影者・撮影日が明らかでなく、著作権などの関係で選外となったことは非常に残念であった。次回からは、この点に十分注意して応募してほしい。

また、ビデオの部では十七点の応募があり、点数は少ないもののいずれも力作揃いであった。しかしながら、全体的傾向として、解説が長ず

る。私がおどろいたのは、田宮さんが足摺岬に行ったことがなくて、想像で現地の風景を書いたときいたことであった。そのことをたしかめた私に、「私の小説はウソばかりで」と田宮さんは苦笑して、架空の奥州黒菅城を舞台に展開した「落城」を例にあげられた。間もなく私は足摺岬を訪れる機会を得たので、文庫本を持参して現地で読みなおし、「こ



ぎたり、音楽が映像にあまりにも似合ひすぎるといった点が見られる。もっと映像自体に語らせるとか、音楽と映像が対峙するといった試みがなされると一味違った作品となる。

また、ドキュメンタリーについては、撮影してゆく中でテーマが変化することも作品の幅を広げる上で必要であり、当初のテーマに固執するあまり小さくまとまってしまうようなことのないよう配慮すべきである。

写真の部、ビデオの部どちらにも言えることだが、芸術性の観点からすると画面のムダを省いて主題を強調することが重要な意味を持つが、記録性の点からすれば画面にある程度の情報(説明)を盛り込むことが大きな意味を持つ。この相反する課題を解決するためには、自分が何を表現したいのか、いわゆる作画意図がどこにあるのかを明確にすることが必要であろう。

以上が今回の講評の要旨であるが、こうした点をふまえ、第五回コンテストには、新しい発見・創造ある作品が寄せられることを期待している。

をさされる。「何もかも辛抱よね」というのが彼女の口癖である。ようやく戦争が終わって、頼りにできると自慢にしていた孫が、こんどはアメリカ軍の占領政策違反で捕えられ、志げばあさんは吸江湾で二度も飛び込み自殺をはかる。「いくら辛抱、辛抱というても、辛抱にもかぎりがあるあね」と彼女はたえずそうつぶやくようになる。

この小説に強い感銘を受けた私は、

田宮虎彦さんの文学と

土佐

塩田庄兵衛

それから「霧の中」「落城」などなどの作品を次つぎに読んだ。そして作者とも面識を得た。やがて「足摺岬」が映画化され、たまたま帰省していた私は、高知の映画館で全国に先がけて封切りされたそれを観た。ヒロインの津島恵子をはじめ俳優たちの土佐弁がおかし

くなったところでは、一見の価値がありますから御来遊をおすすめします」という絵はがきを、東京の田宮虎彦様宛に出した。そして、これくらいイマジネーションを持っていない小説家にはなれないのだ、と理解した。

温かくて明るいと感じられた田宮さんの一家(夫妻と二人の令息)と私の家族とが、信州の高原で夏休みの数日をご一緒させていただいた

(東京都立大学名誉教授
立命館大学名誉教授)

田宮虎彦さんのことを書きたい。去る四月九日、私と妻は姪の結婚式に呼ばれて、神戸に出かけた。控室で顔を合わせた花嫁の母にあたる私の妹が、「お兄さん、田宮虎彦さんがマンションから飛び降り自殺したというニュースをやっていましたよ」と知らせてくれた。「アッ」と思ったが、間もなく華やかな祝典が始まったので、そちらにおつきあいました。夜が更けて、田宮さんが少年時代を送った神戸の、港を見下ろすホテルの部屋で、暗い海面を眺めながら沈んだ気持ちにとらえられた。いくつかの新聞等が筆を揃えて、傷つきやすい感受性と誠実なところが読者にしみこんでくる田宮文学の特徴を強調して、ユニークな作家の思いがけない死を悼む文章を載せたが、それらの中に、田宮文学のふるさととは土佐であった、という指摘がみられないことが私には不満だった。私が田宮さんの作品をはじめて読んだのは、たぶん「ある女の生涯」(一九五二年三月『改造』)であった。高知市内に住む安岡志げばあさんは、宿毛出身の夫が幸徳秋水の「大逆事件」との関係で疑われて自殺し、世間から「明智光秀の女房」と爪はじきされる。つづいて息子が朴烈事件にかかわって身を滅ぼしたというので、「光秀のおなん(母親)」と後指

き、千代夫人は、「塩田さんの奥さんはやはり土佐の方ですか」ときかれた。「いいえ」と答えると、「おや、他国の方ですか。私も他国の女ですよ」と面白そうに笑われた。当時二歳ばかりであった私の娘は、夫人に「ずいぶん可愛がってもらった。それから間もなく、夫人は胃ガンで亡くなられた。田宮虎彦・田宮千代共著の『愛のかたみ』が出版されたことを知るひとは多いだろう。それ以来私たちは、機会に恵まれなくて御無沙汰をつけて今日に至った。

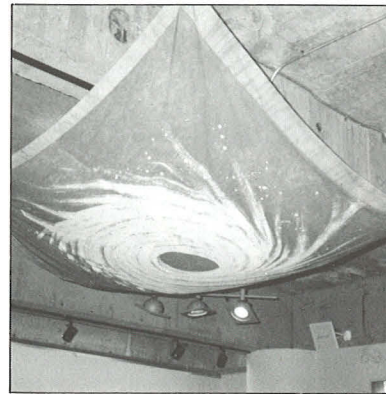
「足摺岬」では、自殺志望の学生にむかつて、老いたお遍路さんがさす。「のう、おぬし、生きることは辛いものじゃが、生きておる方がなんぼよいことか。」

しかし、「人生は小説の中だけにしかない」と書いた田宮さんの色紙を見たことがある私は、千代夫人を失って孤独を辛抱しぬいてきた田宮さんが、病気で作品が書けなくなつて自殺したことは仕方がない、という気がする。そして、土佐で暮らした年月こそ短かつたけれども、田宮さんも私もやはり土佐の人間で、したがって田宮さんの作品は、土佐人にはその味わいがことに深い、と私は信じて疑わない。

土佐紬を染める

—ふるさとでの個展を終えて—

上岡昭美



「わが愛しきふるさと」
個展を無事終えさせてもらったことを感謝します。これを済ませなければ死ぬに死ねないと思いつめていた悲壮な気持ち、人間皆それぞれ過去を背負って生きていきます、その重荷なのかもしれません。……
思い起こせば長い道程でした。海の紺、空の青、山の緑につつまれた楽園「土佐」。その自然の営みの中で育まれ、そして、いつとも知れず人々から見捨てられていった白い紬。ほの暗い土蔵の片隅にボツンと淋しく取り残された一反の黄ばんでしまった紬を手に入れた時、その時から、ほわあんとした不透明な、大きなこれからの自分の生命のすべてのような大きな球の中に、わが身を委ねてしまったのです。

それから、わが身よりも大切な宝物、初めて赤子に触れるが如く震え

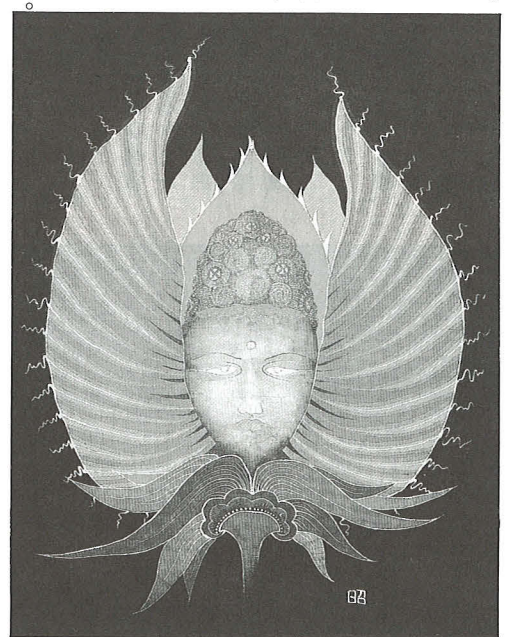
る指をそっと愛でつつ、幻の霊域で白い紬を染めることが始まったのです。

見渡す限り一面の緑、風にそよぐと所々浅緑の波がたゆたう香長平野のあちこちで、昔は織られていた地縞と言われる紬、その地味なイメー

ジとは違うものを。和紙に一滴水を含ませるとふわっと円が広がってゆくような、そんな美しい美しい色も、もう一滴、もう一滴と重ねてみたかったです。

赤い太陽、焼けた砂浜、激しい台風、大きく広い海、山の樹々、美しい清流、どれも抽象的な染の表現しかできない。土佐の民話「シバテン」、そうだ、着ない着物として自分の

カップを染めてみよう。染では顔面を鬼門とするところがあって、風景とか花が好まれ、顔面の多いわが作品は注意されることがしばしばある。しかし、歴史とは不思議なもので、胸をはってわが道を行き、強引にそれをやってのけると人々はそれを真似ようとする。人が真似ようとする、それはもう極く



当り前のこととなってしまふ。

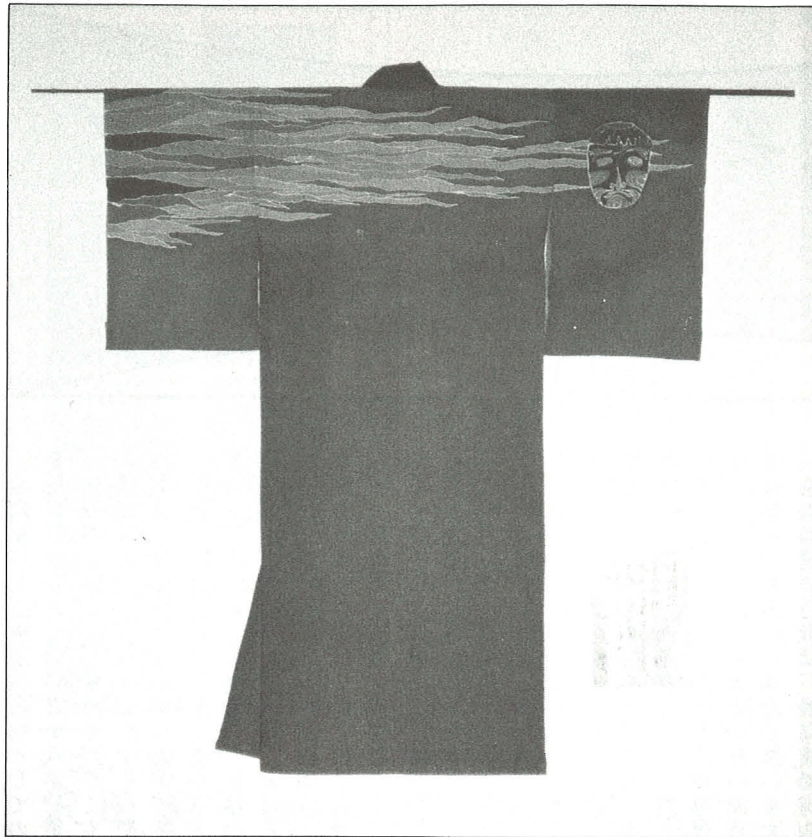
早く、なるべく早く、あの白い紬が織り始められ、わが懐に届くことをひたすら念じつつ、静寂とした幾年の時が過ぎ去ったことか。

ふるさと土佐で待ちに待ったあの白い肌色の紬が甦った。再び織られるようになったのです。すっかり精練され早く色を入れて下さいと言わんばかりの物、まだ少しばかり湿っぽい物、糊のいっぴいついたゴワゴワした物、今それらに囲まれて、熱い想いで染めあげています。

なのにも自分で自分の思い通りにならないでだだをこねてる子供みたくに手におえない代物で、紬特有のふしに泣かされたかと思えば、ふしが絹の輝きを見せて浮きだしてくるこ

ともある。手抜きをすると、薄っぺらな安物のただの木綿の布にしか見えない姿が顔を出す。染料をすつかり含んでくれて、とても素敵なお色が出来上がったら、思わず「ありがと」"とつぶやいたり……。
展覧会で「素晴らしいですね、布は何ですか」と問われれば、ひと呼

吸して、誇らしげに「土佐つむぎです」と笑みを返す。
都会の刺激が邪魔になりだしたなら、ふるさとでいろんな人を訪ね行き、それを染料に、人工では出せない落ち着いた色合いの土佐紬をいつまでも染めたいと、愛しきふるさとに想いを馳せています。
(染色作家)



来たる九月二十七日から十月一日まで、高知にて「日本青年会議所第三十七回全国会員大会」が開催されます。大会を記念して、私達は「一万人野外コンサート」を企画いたしました。これは、高知県の「国民休暇構想」を支援し、新しい高知の「顔」づくりとともに、若い世代を県外からも集客するのが狙いです。

なければ経済上不可能である。以上のような理由から青年会議所が各機関の協力を頂いて「野外コンサート」を主催することとなりました。今回来高予定の音楽家たちの支持層は、高校生から二十歳代の勤労者です。五月十四日の前売券発売日には、各プレイガイドに長蛇の列が出来、販売も好調です。



年令的に、私達青年会議所のメンバーもほとんど知らない音楽家を若者達は知っていて、開催を楽しみにしています。私達は、このコンサートを青少年版「国民休暇」のメニューの一つとして位置付け、準備を推進しています。前例のないイベントだけに全てが試行錯誤の

性のあるイベントである ②性質上、行政単独では開催できない ③施設管理面等の理由で民間企業単独でも開催できない ④したがって、青年会議所等の公共性のある団体が主催する必要がある ⑤舞台関係費・野外架設備等は多大な経費が必要となるため「冠スポンサー」の協力が

繰り返します。真夏の祭典として、二十一世紀を担う青少年達に深い感動と郷土愛を与えることが出来、事故も混乱もなく、関係者の皆様の深いご理解のもとに、大成功させるべく、頑張りた

(社)高知青年会議所 事業二部部長

第六回安芸全国書展にあたって

5月29日(日)～7月31日(日)

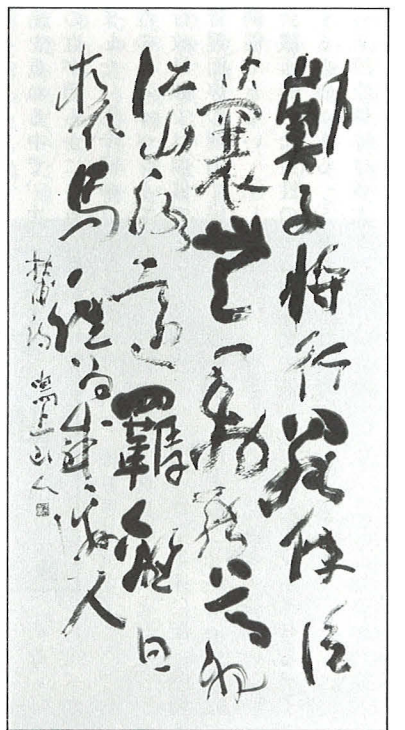
浜田 義之

全国初の公立書道美術館としての発足を記念して、昭和五十八年、第一回安芸全国書展開催以来、早くも六回を数えるに至りました。その間若干の紆余曲折はありましたが、第一回展の出品数八百六十二点からスタートして、回を重ねるごとに逐次発展を示し、第六回展には、北は北海道から南は沖縄まで、全国四十一都道府県からの参加を得、出品点数も過去最高の千五十六点を数えるに至り、徐々にではありますが安定的な成長を遂げてきたといえます。

これもひとえに、第一回展より審査顧問として引き続き御助力を頂いた、日本芸術院院長有光次郎先生をはじめ、今は亡き日本書壇の巨星、手島右卿先生らの御教示の賜物であります。また、南不乗先生の一贯した公正無私の審査と献身的な指導運営、そして全国出品書家の熱い期待と信頼感の蓄積のお蔭だと思えます。

第六回展の特徴は、最高賞である文部大臣奨励賞は該当者なしとされたことです(過去第三回展にも一度ありました)。その理由は、上位入賞作品はそれぞれ粒よりの力作揃いでしたが、その中で断然群を抜いて傑出した作品が見当たらず、最終的に該当者なしとされました。

次賞高知県知事賞一点には、岩手県の梅津鳴上さんの杜甫詩の作品が



高知県知事賞
梅津鳴上(岩手)

選ばれましたが、梅津さんは、過去第四回展に文部大臣奨励賞を受賞し、引き続き第五回展並びに第六回展と、連続高知県知事賞受賞の栄に輝いた方で、東京書作展の審査員もされています。今回は当書展の招待作家推薦基準に照らして、第四人目の招待作家となられたわけであります。

安芸市長賞は、通常三名の受賞ですが、文部大臣奨励賞が該当者なしとなったことと、上位四、五名の作品が甲乙つけがたい力作揃いのため、今回展は安芸市長賞五名と決定されました。この方々はみんな、過去何回か上位三位を受賞された、いわば当書展の「三賞常連作家」の皆さんであります。

「夢」を出品された、愛知県の井野吟紅さんは、第五回展において最高賞の文部大臣奨励賞を獲得された

方であり、毎日展の審査会員です。「沙羅の花」を出品された、東京の村美江子さんは、第二回展並びに第四回展に安芸市長賞を受賞、今回で三回と回を重ね、読売賞も受賞されている方です。「雨聲」を出品された、東京の中野真如さんは、第二回展の高知県知事賞、そして第五回・第六回展と安芸市長賞を連続受賞している方です。「昭和万葉集」より八首の和歌を出品している、本県の沢田明子さんは、地元ではただ一人、第二回展より安芸市長賞連続四回の栄に輝く書家であり、また高知県文化賞の受賞者であります。「遠巒」を出品されている、東京の井上庭柯さんは、第二回並びに第三回展と市長賞を連続し、今回展が三回目の受賞であります。以上のように、安芸市長賞受賞の五名は、いずれ劣らず各

回上位に覇を争って、締めきあつてこられた、本展招待作家入り寸前の方々であります。

上位三賞に次ぐ賞は、書道美術館賞十五名であります。本県の中平松鶴さんは、第二回展以来連続五回書道美術館賞を受賞されており、同じく県内では、大野祥雲さんが、三回・四回展と連続して書道美術館賞を獲得しています。

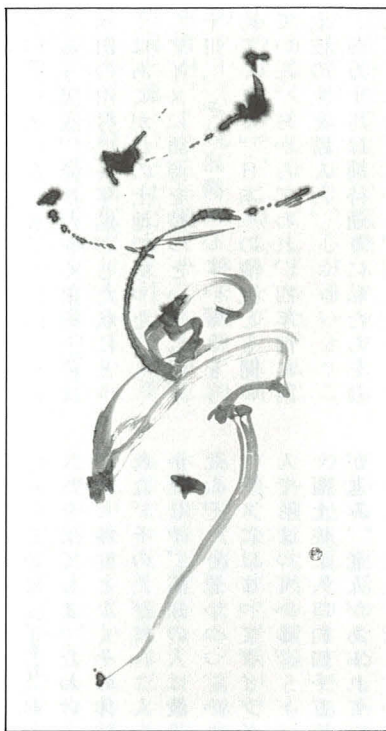
書道美術館賞に次ぐ賞は優秀賞で、第六回展の該当者は二十二名です。今回展では県内書家が大きく進出して、受賞者の半数近くの九名を占め、新しく伊藤丘城さん・森岡和子さん・玉井美香さん・都築瑞さんの四名が加わりました。ちなみに県内書家で、過去優秀賞二回以上の方々を挙げてみますと、大野祥雲さんの四回・浜田尚川さんの三回と川崎翠村

さん・川添龍翠さん・和田大康さん・吉川祥雲さん等の二回です。

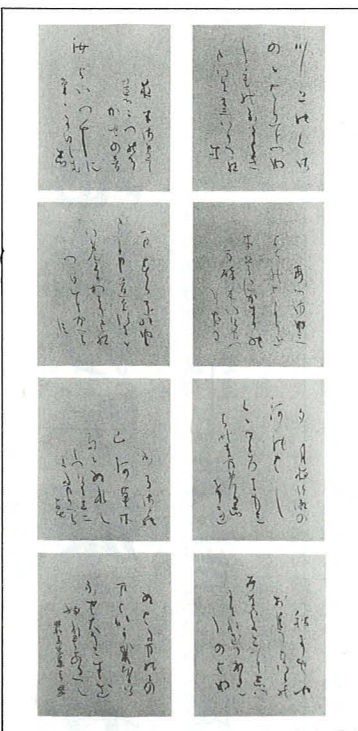
入選総数は三百五十点、入賞入選率は三七・二パーセントと、中央書展に比較しても非常に厳しいものになっていきますが、全国書展にふさわしい質の確保と展示壁面のスペースとのかかわりもあるわけであります。

県内書家の出品状況は、過去はほぼ百六、七十点台でありましたが、今回展では漸く二百点を超え、入選者数も六十六名、三八パーセントと上昇しました。審査員の南先生は、全国レベルで、県外書家とその技を競う折角の機会なのだからと、県内書家の皆さんの一段の奮起を望まれています。

きます。出品作品は書体、書風各分野にわたる多彩な作品で、全国書展にふさわしい内容を持つており、質的にも年を追って充実と向上のあとがうかがえる。特に上位入賞作品には、中央書展の審査員クラスのものも相当多く、典型的なものにしばられずに、自由と創意に満ちた見応えのある作品がかなり多い。ただ、上位入賞者の顔触れがやや固定化している感もあるので、新人の発掘にも意を注いだが、上位の賞に食い込むほどの作品が見当たらないことは残念であった。来年度こそは、この厚い壁を突破する新人の出現を切望して止まない。入賞者の中の三分の一程度のもものは一面識もない全く未知のものもいる。しかし、たとい一面識もない人でも、断然群を抜いた作品とおぼしきものには、最高賞に挙げることを決して躊躇しないといわれている。



安芸市長賞
井野吟紅(愛知)



安芸市長賞
沢田明子(高知)

過去六回、南不乗先生の審査に付き添って参りましたが、全作品に必ず三回以上目を通されること、行き届いたこまかな心尽くしと配慮、全く情実のはいる余地のない徹底一貫した作品主義、心魂を傾けての慎重さと公正さ、二日間に亘り心血を注いで疲れも見せぬ慧眼・心眼の厳肅さが、ずぶの素人の私達にもある種の感動を伴ってひしひしと伝わって参ります。まさに全責任を一身に背負われた審査ならではの緊張と、すがすがしい雰囲気には満ちています。

最後に今回展に対する南先生の審査概評を要約してまとめとさせていただきます。

安芸市は往年、書道のメッカとして全国にもその名を知られた土地であり、川谷横雲・尚亭・近くは手島右卿その他多くの書家が輩出している。どうか、書に志を抱く全国の書友の方々とその技を競い、広く天下に目を向けることを、郷土の諸兄弟に渴望してやまないと結ばれています。

(安芸市立書道美術館館長)

地域の医療を考える

西土佐村の健康づくり運動

宮原伸二

はじめに

四面を海にかこまれた四国、荒れくるる黒潮、光かがやく南国土佐は、秋田の山村で長年過ごした私にとってはあこがれの土地であった。

アイヌに語源を持つという「四万十川」、その語調は心よい響きを与えてくれる。日本一の清流とも聞いていた。村から乞われ、四年前に西土佐の土を踏んだ。

四万十川は期待通りに私たちを迎えてくれた。しかし、西土佐の空は狭い。険しい山に遮られて少ししか空が見えない。道は四万十川とその支流に沿って蛇行し、あまりにも狭い。これには驚いた。そして、小石を積み上げた段々畑。その猫の額のような土地を利用しての多くの作目作り。東北の三反歩田を見慣れ、米一本の農業を見てきた私にとって、この苦難を乗り越えた英知と努力に感嘆さえおぼえた。

知らない。前医はそのことを全く話していなかった。家族は、ガンであることをBさんには絶対話さないうでくれという。回復を願っているBさんに延命のために鎖骨の下の静脈に栄養管を入れたり、薬なども積極的使用をえなくなってしまう。しかし、病状は日々に悪化し、麻薬のカクテルなどを使用しても痛みは止まらなくなった。Bさんは、私の医療に対する不信からか、次第に私ばかりでなく、医療スタッフとも口をきかなくなり、心が通い合うこともなく亡くなってしまった。私どもの診療所で、このようなガン末期のターミナル・ケア（終末医療）の患者が、この三年間で十二人もいた。以前と違い、今はたとえ村の診療所であっても軽い病気だけをみていればよいという時代ではなくなってしまう。

ガンの再発があっても手術した病院への再入院はままならず、介護人もおらず、往診でも対応できない人、また、重病で村で死にたいという希望なども多くなってきた。こんな患者さんは、やはり村の診療所で面倒をみざるを得まい。この傾向は今後ますます強くなると思う。しかも、診療所といえども、ガン告知の問題を正面から取り組まなくてはならない状況になってきた。

酒の飲み方は、言われていた通り豪快だ。私は、酒量日本一を争う秋田から高知に、つまり「おとらコーズ」を来てしまったわけである。その後、幾度となくその体験をさせられた。そのたびに「こんな酒の飲みかたじゃ、高知の人は最後は肝臓で死ぬぞ」と思いつつ、いつしか高知ベースにはまってグイグイと酒を飲んでしまっている。

西土佐（人口約四千五百）も過疎が進み、老人があふれている。老人の健康・福祉対策は村の重要課題であり、その一環として四年前に多額の金をかけ、有床の診療所と健康づくりの館として保健センターと健康センターを新築した。その診療所と保健センターへの期待は大きい。

いくつかの症例

〈Aさんの場合〉

Aさんは八十五才のおじいさんである。おばあさんと二人暮しだが、

できれば、Aさん、Bさんのような人を出したくない。そのためには、常日頃から健康に関心を持ち、できることなら子ども頃から意識的に健康づくりに励むことであろう。

〈Cさんの場合〉

それにしても西土佐村には「我慢型」「気づかず型」の病人が実に多い。膝の関節がガタガタに変形し、痛みも強く、かろうじて歩行が可能な人が畑や山へと菌をくいしばって行っている。生活のためもあるが、昔の農民気質そのままである。

肝臓は沈黙の臓器ともいう。かなり悪くなるまで症状がでないからである。大酒を飲み、重労働をし、十分な栄養を取らなくても症状が無ければまったく健康体だと思っている。腹水がたまってからあわてても、もう後の祭である。こんな「気づかず型」は、肝臓ばかりでなく血圧、心臓病などでも多くみられる。

Cさんは、風邪で診療所を受診した。腹部の触診で肝臓の肥大があったので、血液検査をしたところ肝臓障害が認められ、入院治療を進めた。「なに、先生は大袈裟ですよ。体もだるくないし、食欲も上々ですよ。空ベットふさぎに入院させられちゃたまらない」とにぐまれ口をたたき、入院も外来治療も拒否し帰ってしまった。

二人とも病弱で、ほとんど寝たきりの状態である。ホーム・ヘルパーが週三回訪問して生活の援助をし、保健婦も週一回は訪ねている。私も必要に応じて往診をしているし、看護婦による訪問看護もしている。医療・福祉関係者の協力での老夫婦の生活がなりたっているといっても過言ではない。

そのAさんは、栄養失調と心臓病のため全身がむくみ、診療所に何回となく入院した。痴呆もあり、食事から大小便の世話までしなくてはならないので、病院ほどスタッフが充実していない診療所にとっては、ひとりでもこんな患者が入院することは大変なことである。「おい、この診療所は雨漏りがするから、はやく修繕しなさい。水にすべて転びそうになった」なんのことはない。自分が寝ぼけて床に小便をしてしまい、それにすべった話であった。A食事をしっかりと取ってもらおうと

それから一年後、Cさんは肝臓病からきた食道静脈瘤の破裂で、血を吐いてU市の総合病院に入院した。一時生命もあやぶまれたが九死に一生を得、最近やっと自宅に帰ってきた。しかし、もう仕事ができる体ではなく、日常生活を自力でするのが精一杯である。

健康づくり運動

高知市が健康づくり運動に励んでいるのも、こうしたA、B、Cさんのような人を出さないためであろう。私は人口三十万都市で高知市ほどしっかりと健康づくり運動を展開しているところを知らない。西土佐村でも積極的に健康づくり運動を始めている。しかし、この運動が大多数の住民のものになることはなかなか難しい。

関心のある人、時間の余裕のある人が検診や人間ドックを受け、無関心層や仕事に追われている人の健康チェックが野放しになってしまっている。特に健康学習などは実に限られた狭い範囲の人に行われていたにすぎない。

進行ガンや脳卒中、心臓病などは、その未参加層から多発している。そこへ切り込んでいかなければ、ほんとうの健康づくりなんかできるわけがない。

さんはグングン良くなり、いつも三週間ほどで退院になる。もう五回も入退院を繰り返している。老人ホーム入所を何回か勧めた。どうしてもいやだと拒否されてしまう。どんなに不便であっても、山の中の一軒家であっても、そこに住んでいたという。

西土佐には独居老人が約九十人、老夫婦世帯が約百軒もある。Aさんのような人がこれからもどんどん出てこよう。村の診療所は福祉などの関係者と連携をはかり、しっかりと対応していかなくてはならない。

〈Bさんの場合〉

Bさん（七十五才）は三年前に、ある病院で胃ガンの手術をした。ここ二ヵ月前から食欲不振となり、日々に腹痛が増してきて、病院を受診したところ、主治医から家族は「胃ガンの転移なので、もうすることも無い。近くの医者に痛み止めと栄養注射でもしてもらいなさい」といわれて帰ってきた。

患者まで十キロの往診を連日、日によつては二回も行ったが、痛みと食欲不振のため「できれば自分の家で家族の看病のもと、やすらかに死を迎えさせたい」という家族の意向に反して入院させざるを得なかった。Bさんは「ガンで手術をしたこと」も「ガンの転移」ということも

それを打ち破るひとつの方法として、西土佐村では、三十ある地区のすべてに保健推進委員会を設置（一地区五〜十人）し、その地区の保健計画を、その推進委員を中心に立案するといった住民参加の健康づくりを展開している。

学習会（健康学習会、料理教室、健康相談など）やスポーツ活動が自主的に立案され、実行されている。学習会だけで年間四百回も持たれ、七千人以上の住民が参加している。

こんな自主的な活動が、地域の住民に力をつけ、自主的な調査活動（生活調査、タバコ調査、疾病調査など）を通しての問題の掘り起こしがなされ、問題意識の向上活動（健康学習会など）へと進展し、健康づくりへのすばらしい実践活動（検診受診運動、食生活改善、禁煙運動、セルフ・チェック、無農薬野菜、ミニコミ紙の発行など）へと発展している。このように健康力を向上させることが、これからの健康づくりに欠かせないと思う。

健康づくりに、医療と福祉との連携、また、社会教育との連携の必要性は明白であり、そして、なによりも主体者である住民の自主的、主体的参加がなければ健康づくり運動を推進することはできないだろう。（江川崎診療所所長）



県道高知土佐線(針木)

手前の石燈籠はかつて朝倉神社の遙拝所として地元の人々に親しまれ、数百年を経た今日も、朝倉神社の夏祭りの前夜(7月23日)には老人クラブ「楽天会」が中心となり、この燈籠に絵馬をかけて祭りを行う。

私の風景

田中 俊

私は、早く「建築家」になりたいと思つて努力している「建築士」です。建築の設計及び監理(管理とはちがいます)をやつてきました。それに加えて最近、建築の設計以前の提案の部分と、コンピュータによる作画(CAD)について手を染め始めたところです。

全国的にみても女性の建築士がずいぶん増えてきましたが、私が建築の世界に入ったのは、建築に興味があったからとか、好きだとか、やり甲斐がありそうだからとか以外に、もう一つ理由があります。建物というのは、男も使えば女も使うものです。それに、男性ばかりが設計しているのは不公平じゃないですか？ 私達女性も仲間に入れてもらつて一緒にやりたくなあと思つたからです。

それぞれの仕事

建築士

楠瀬 路易子

繰り返します。

建築は、美術や音楽と違って、嫌いだとか、美しくないとか思つても、取り除く事ができません。住む人や設計者が良いと思つても、道行く人にとっては、はた迷惑なものかもしれません。そういう意味での難しさがあつて、責任重大であると共に、それ故のおもしろさも無限大で、やめられない私です。

私達女性は、家事分担も含めて、お互いがそれぞれの立場や良さを認め合い、良い影響を与えながら、仲良く仕事ができる日が一日も早く来る事を願っています。

ある人は「建築は悪魔の道だ」と言います。一度入り込むと、悪魔に魅せられたようにする引き込まれ、一歩まちがうと、奈落の底へ突き落とされて針のむしるに座らされる……そして、あがいてもあがいても抜け出せないというように。しかし決して暗闇ではありません。ある時は非常にさわやかで明るい希望に満たした気分です。いっばいになり、またある時は自信を喪失して、落ち込んで真暗な事もあります。落ち込んで落ち込んで、また自ら奮い立たせて頑張るといつかのこと繰り返します。

野外彫刻展

in高松



高崎 元尚

四月二十四日から五月二十九日まで、高松市で開かれた野外彫刻展の会場となった中央公園は、高松駅を起点として南北に走るメインストリートにそって、ほぼ市の中心部にあり、面積は只今工事中の高知の中央公園の四倍くらい大きいです。元はグラウンドだったのを、やはり地下を駐車場にして三年前に公園化したそうですが、大変羨ましいと思つたのは、中央の芝生の部分が野球場くらい大きく、大集団を受け入れることが出来るので、様々な市民活動の中心になってきていることでした。そこに配置された彫刻たちは、つどつた人々に話題を提供したり、あるいは遊具となって子供たちの人気を博したりで、次々と行われる諸行事と複合して、公園のひいては街全体の活性化に役立っているように思われました。

この野外彫刻展は、『都市環境と彫刻』『ふれあいと創造』それに『瀬戸大橋架橋記念』というサブタイトルで、高松市・高松市教育委員会・野外彫刻展開催実行委員会によって主催されたもので、出品作家は、香川8・徳島2・愛媛3・高知3・岡山4の計20名で、高知からは都築房子、門田修充、私が参加しました。

出品作家の選考が京都大学教授の乾由明、大原美術館長の藤田慎一郎、建築家で自由民権記念館コンペ審査

委員長でもある山本忠司の三氏によつて、「作品の傾向にこだわらず、従来の仕事の実績にもとづいて討議し決定」された結果、各県の伝統、あるいは県民性の違いが突出する形となり、その点が非常に面白かつたと思えます。例えば香川と高知。

香川は伝統的に工芸の盛んな所ですが、近年は建築とタイアップした石のモニュメントの生産地として有名でもあります。イサム・ノグチ、流政之といった国際的な彫刻家がアトリエを構えている事でも知られています。流は今回は石ではなくプロンズですが、石の彫刻の新しい伝統は、速水史朗、空充秋等によつて着実に展開されています。その事自体は大変すばらしい事ではありますが、石である事による加工上の制約と恒久設置の原則の故に、突飛な事が許されず、程々に常識的ならざるを得ない半面があるようです。

その点、高知の作家達はまるで屈託がない。「一番面白い」「いや、恐れ入った」という賛辞をしばしば頂戴しましたが、あなたがちお世辞ばかりとも言えない。縛られる伝統が何もないためか、平気で何でもやってしまう所が私達に共通にあつて、それが高知勢の際立つた特徴になっていると思ひました。

都築房子は、伝統的な彫刻の素材である石でも、鉄でも、木でもない、

いや木ではあるけれどもおおよそ彫刻用とはいえない無価値な雑木で、巨大な犬の家族「ケルベロス」を作る。子供達が群がってよじ登る。すると俄然、犬達が「彫刻」の殻を破り、新しい生命を獲得する。

門田修充もまた雑木を用いるが、更に一層無手勝流である。「例の(目のない)トンボ」は、本物のトンボに似せようとしている訳ではない。大昔の機械のような、足で踏んで羽を動かす素朴なからくりを楽しんでいるのである。子供達が集まって来る。自分の足で確かめたい子供達が行列を作る。予期しない商売繁盛で装置が壊れ、芸術家は修理に大わらわである。

最後に私の作品については、私が大変気に入っている、ペンネーム(赤)氏の論評を引用させていただきます。

「高崎元尚の『立方体の不能』は、十五メートル四方を占拠する銀色のパイプが自重で押しつぶされた立方体だが、その中には更に八つの立方体が含まれている。くねったワケ組みが風に揺られ、たゆたう時、初めて存在が主張される。立方体であることも、壊れ去ることも果たせず、そして環境に定着することも果たせない、まさに『不能』なのだろう。」

(五月二十六日「四国新聞」より)
(現代美術家)

個性を尊重する作歌

佐藤いづみ

昭和も初期のこと。『写真芸術』と称する全国誌があり、高知市新京橋の「有光写真館」館主の有光滋樹（一八九五—一九六二）はその愛読者だったという。彼は若年から短歌を好み、橋田東声（一八八六—一九三〇）らについて作歌をしていたが、同志らと新しく『短歌芸術』とよぶ短歌誌をはじめた（昭和五年）。

地方短歌誌に対するこのネーミングに往時の彼らの思い入れをみるに、端的に言えば、作歌について「個性を尊重する」ということに尽きるように思う。一人一人を大切にすることである。このことは昔も今も少しも変わっていない。「はたちの人には二十の歌があり、五十の人には五十の歌がある。まっことの、正直なところを精一杯よむこと。世の美しいもの、書画・芸術作品など何もかも吸収して自分の滋養分にせよ」とも有光師はいつた。

この言葉は私どもの指針であるとともに志向するものでもある。



短歌が好き、短歌を作っていた、発

クラシック音楽同好会

レコード・コンサートの夕べ

大野 稜子

「レコード・コンサートをやってみませんか」という声に、居合わせた二、三人の方の賛同を得て、早速第一回「モーツァルト特集」をS氏のガイドで開催したのは七年前のことでした。

たちまち十人程の愛好者が現われ、毎週土曜日六時半から約二時間、それぞれの愛聴盤で一晩ずつガイドを務めてゆきました。若い人の参加もあり、十人十色のバラエティーに富んだプログラムが生まれました。

それが意外にお互いの興味を呼び、百回、二百回と回を重ね、今年はじめの三百五十回記念コンサートには、各自とおきの一曲を持ち寄り、ささやかな祝宴もしました。

コンサート
のファンも徐々に定着し、一週間に一度顔を合わす優しいさのようなものもうれいことです。また、県外に転動した方や、東京に進学した方なども帰ることがあれば、新盤を土産に参加したり、音楽情報を送ってくれたりして、この会を盛り上げてくれています。



高知県オリエンテーリング協会

みんなのスポーツ
オリエンテーリング

竹本 笑子

地図を読み、コンパスを頼りに、4km内に置かれたいくつかのポストをチェックしながら、歩いたり走ったりするこのスポーツは、性別・年齢・経験別にクラス分けして行われている。「間違っからいやだ」という人が多いと思うが、迷って、しんどい、つらいと感じたその時から、協力と励まし合う気持ちが生まれてくるのである。

親子で参加し、親の腰を子供が押す上り坂。皆で地図を見ながら相談し「アッタ！」と喜声をあげて記しをつけるチビッコ軍団。昼食時は、失敗や苦しかった所等の話が次々と出て大賑わいである。



何年か経験をつみ、家族から離れて一人で走り回る若者は、孤独と闘い、自分で判断し、行動する力を確実に身につけて行く。「間違ったら判断出来る地点まで引き返せ」の鉄則を守り、無事ゴールした彼等を、参加者は拍手と笑顔で迎える。かつては、背負われて参加していた幼児が、小学生になり家族組で参加しているのを見る。そんな時、私はこのスポーツは人生の縮図の様なものだと思う。

試行錯誤の三カ年

石本 昭雄

農協あさくら

『農協あさくら』（月一回発行）は七月で一三三号になるが、当初、職員だけで編集発行していたのを拡充強化するため、編集委員会が発足したのは昭和六十年八月であった。委員は、婦人部・青壮年部・若妻会の三組織代表と組合員有志で構成され、ただ今九名である。いずれも米・野菜・生姜作りなどには一角の自信と経験をもっているが、畑の自信と経験は全くの素人で当惑したけれども、チームワークを支えに、手探り、手作り、手弁当の試行錯誤の三年が過ぎた。

毎月下旬、出来上がったばかりの紙面を、反省・点検しながら次号のプランをたてる。三人ならぬ九人寄っても文殊の知恵には程遠いが、素人は素人なりに、手作りの味を生かして次第に独自のカラーを持つようになったといえようか。

十日の原稿締め切りには時に遅れも出るが、二十五日発行は至上課題である。取材・校正・再校と委員も職員も本業の時間を削って取り組み、時には深夜に及ぶこともある。

つ「私のあさくら」は二十五回を数えている。



（農協あさくら）編集委員長
連絡先 四四・一七一
（朝倉農協・門田）

表したい、批評されたい、作ったら間違っと言葉遣いなど直してほしい——などの人びとに私どもは大きく門を開いている。現会員は二十代から八十代。働いている人、療養の人、障害のある人、男女、居住地は高知県を中心に北海道・九州。月一回の歌会、随時吟行会を催す。歌会は当月号に発表の各自作品を共同研究批評する。一生懸命生きているな、という真実が体感される集いである。

（短歌芸術代表）
連絡先 780高知市曙町一四一七
四四・一三二〇（佐藤）

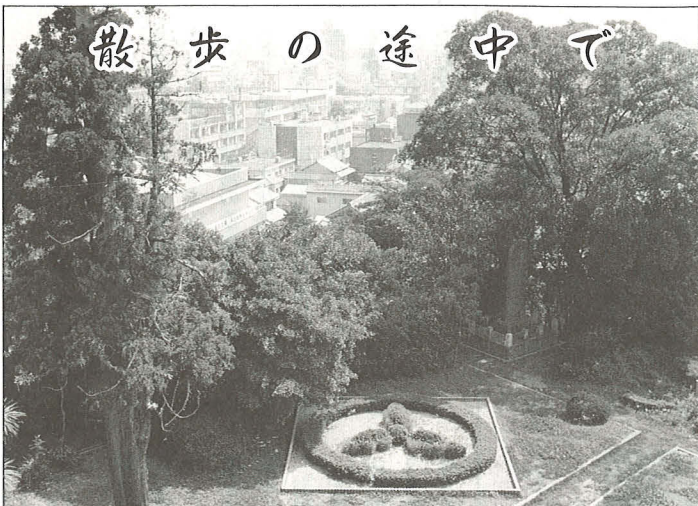
世話役は丁女史ですが、皆忙しくて、ガイドを頼むものにもなかなか苦勞することがあるそうです。しかし、誰かが穴を埋めて、危うくも滞りなく続くのは、本当に好きでなくては出来ないことでしょう。

何気なく始めたレコード・コンサートですが、なかなかいいものだとつくづく思い、お好きな方の参加をお誘いする次第です。
（クラシック音楽同好会会員）
連絡先 三三・八〇六二（リベルテ）

昭和五十年四月県協会が発足。現在公認指導者六十名、会長の多田氏、七十六歳の増本氏は共に全国大会で優勝された方々。「今年も走るぞネ」と各大会に参加されている。

大自然の中で、誰でも参加出来るウォーキングオリエンテーリングで、仲間づくりや体力づくりをしてみたいかですか。私達は、間違ったくないと念入りにコースを設定し、皆様の参加をお待ちしています。
（高知県オリエンテーリング協会副会長）
連絡先 四三・四一六三（竹本）

散歩の途中で



高知城の「一豊の妻の銅像」を北に入った一番奥の花壇は、山内家の家紋「三柏」をかたどっている。これは城内の目に付く所に家紋がなかったことから、昭和五十三年十月に三の丸から市内を眺望する折に見える位置に作られた。柏の葉の輪郭の部分がストウツゲ、まわりと各葉の中央部分、三柏の要の部分はマメツゲが植えられている。

風伯

活動の定着

と、感想文班・鐘井雅宣など十名、記録班・三宅利昌など四名、美術班・畠中智子など三名、調整班・小山敦史など関係者の名前が書かれてあり、さらにこまめに撮影した人小山敦史、苦勞して印刷したところ青雲印刷、製本したところ浜野製本所、気がつけば協力していたところ若竹まちづくり研究所、あど・

ほつく博工舎、「北九州から版」、ギョーカイ組合「ひらけゴマ」、アイ・アートほかたくさんと並んでいる。この本がどのようにつくられたかが、よくわかる。

一冊の本が送られてきた。「ひとりひとりの地球人」「子どもの目に映った戦争原画展」の感想・記録集である。奥付を見ると、半年頑張った発行した所、「愛・平和・未来・そして子どもたち」ネットワークする会代表保美紀子、北九州市小倉北区とある。奥付にはつづいて、楽しんで編集した人び

「ポラランドの子どもの目に映った戦争原画展」は、昨年全国各地で開催され、高知でも六十二年十二月十五日から二十日まで、郷土文化会館で開催され、四千人近い観覧者があり大変好評だった、高知と北九州の取り組みを比べてみて、展覧会そのものへの熱心な取り組みに差はないとしても、後をどうフォローするかが、大きく違っているように思う。大切なのは展覧会の成果を、どう定着させるかである。そうした地道さが、どうも高知では足りないように思う。本の素晴らしい出来にも感心させられるが、こうしたことの大切さを、改めて教えられる本であった。

文化セミナー「都市と文化活動」

私たちが快適な都市生活を送る上で、文化活動の持つ役割は近年ますます大きなものとなっています。

この文化活動の重要性にいち早く着目し、独自の文化活動を展開してきた藤沢市の葉山峻市長をお招きして、都市における文化活動の役割、市民による独自の文化の創出について、藤沢市の具体的活動事例をもとに講演していただきます。

●日時 7月5日(火)午後3時～5時
●場所 高知市職員研修所
(電気ビル4階)

●参加費 無料

●申し込み 電話か葉書で事業団までお申し込み下さい。定員は申し込み先着80名まで。

《次回の日程》

9月27日(火)高知共済会館三階

森本忠夫氏「ソ連の現状について」

新刊 高知レポート2・3 評中 好発売

『高知レポート 2 いかにすれば都市の河川はよみがえるか』

今井嘉彦著
『高知レポート 2 いかにすれば都市の河川はよみがえるか』
今井嘉彦著



『高知レポート 3 高知の森林と林業・山村』
高知県緑の環境会議・森林・山村研究会がまとめた本レポートは、森林の役割、高知県の森林と緑、林業と林産業、山村の実情を述べたものである。森林・林業・山村の問題は、直接関係する人々だけでなく、広く一般の人々も考えなければならぬ問題となっているが、全国一の山国・森林県である高知では、なおさらさけて通れない課題である。本書はこの問題を考える際の格好の入門書である。定価千円。

長年にわたって水の研究に携わってきた著者(高知大学教授)が、高知市における水質浄化と水辺再生への提言をまとめたのが本書。病んでいる高知市の都市河川を回復させ、新しい河川像を創造するにはどうすればよいかを、豊富な資料や事例をもとに具体的提言として述べてあり、高知市民をはじめ、清流を望む人必読の書となっている。定価千円。

第5回都市美デザイン賞と高知の都市美100選の募集

高知の街に個性と調和をもたらし、いる建築物、建造物を推薦して下さい。

① 第5回高知市都市美デザイン賞

対象 高知市内にある昭和63年中に完成した建築物・建造物

② 高知の都市美100選

対象 高知市内にある昭和62年以前に完成した建築物・建造物

推薦受付は昭和63年11月1日～昭和64年1月31日で、①②いずれも葉書に物件の名称、所在地、推薦理由、推薦者の住所、氏名、年令、職業、電話番号を記入の上、事業団までお送り下さい。抽選で20名の方に記念品を贈呈します。

第3回 子どもの本を語る 高知大会

子どもに読ませたい本や今若い人たちに読まれている本について、日頃感じていることを語り合いませんか。

●日時 7月31日(日)午前9時

●場所 潮江市民図書館

●協力券 五百円

●ゲスト 氷室冨子・赤木かん子

主催 同実行委員会・事業団

高知写真&イラストコンテスト

●テーマ『高知』

●規定 未発表のカラー作品に限る。

●サイズはスライド35mm以上、プリント四ツ切以上、イラストA3以上。

●賞 特選10万円(2点)、入選2万円(10点)、佳作1万円(10点) 優秀作品は観光ポスターに使用。

●締め切り 昭和63年8月31日(水)

●応募先 事業団

主催 県市町村観光連絡協議会・高知市・高知市観光協会・文化振興事業団

市民と留学生の交流会 『ハロー・ワールド』

第2回 マレーシア&モロッコ

●日時 8月28日(日)午後一時半

●場所 高知市中央公民館4F会議室

●参加費 三百円

●定員 百名

●申し込み 電話か葉書で事業団まで

財団法人 高知市文化振興事業団

〒780 高知市本町五丁目二番三号

TEL (〇八八八) ③四三六五

郵便振替 徳島8 14869